PHP

No.770
定価200円

7

[特集]

人生、何度でも立ち上がれる

[明日への思い] 松岡修造 [特別企画] 星空への誘い

特集

私を必要としてくれる人がいる

六年半の間に八つものガンと戦ってきた赤木さん。どのような思いで、ガンに立ち向かっていったのでしょうか。

赤木家康
（医師）
1957年、岡山県生まれ。東海大学医学部卒業。立川病院、阿伎留病院、春日部市立病院、日本大学救命救急センター勤務等を経て、現在は永生病院副院長。著書に『癌！癌！ロックンロール』（産学社）がある。

八つのガンと戦って

私は整形外科医として、六百四十四床の病院の副院長として、昼夜を分かたず命を削るように多忙な日々を送っていました。たくさんタバコを吸い、お酒も飲んでいました。

そんな私に二〇〇五年十二月にステージⅣの進行した下咽頭ガンが見つかりました。その時すでに右の頸部リンパ節に転移があり、頸が大きく腫れていました。五年生存率は三〇％以下。治療のため声帯の摘出手術を受けて声を失いました。

約八カ月間のガン治療の後、T－Eシャント法という発声法で第二の声を取り戻すことができました。そして発症から十一カ月後に復職。声帯を失ってもまたしゃべれるようになり、障害を負っても楽しく生きて行かれることを実感しながら四年半、仕事に趣味に楽しく暮らしていました。

ところが二〇一〇年七月に舌ガンが見つかり、すぐさま摘出手術を受けました。しかし翌年には舌ガンが再発し、広い範囲を切除。さらに中咽頭に大きなガンができて食道を塞いでしまうとともに、食道ガンがふたつも発見されたのです。

中咽頭ガンと食道ガンの摘出手術を受けて、これでガンから解放されるかと思いきや、下咽頭に大きなガンが。これは大きな手術でしたが術後経過が良く、手術を受けてわずか三週間で退院出来ました。

さらに、この原稿を書いている今もまた八つ目のガンが見つかり、二日後に入院、三日後に摘出手術を受ける予定です。

一日一日を生きていく

私は自分がガンになっても、一度も悲しいと思ったことはありませんし、何で自分だけがこんなにたくさんのガンになるのか、とも一度も思いませんでした。ガンで死ぬことも怖くはありません。しかし一つしかない自分の命を、一度もあきらめたことはありません。明るくガンと戦い、生き続けています。

病気になったら、その病気と戦う、あきらめる、つきあう、しか選択肢はないと思います。病気になった原因を考えたり、悔やんだり、落ち込んでもメリットはありません。

人は必ず、一度生まれて一度死にます。遅かれ早かれ、何らかの身体的障害によって死を迎えるのです。

ガンになる前は、病院に勤務し、さまざまな障害を持った方を毎日見ていました。ところが、障害を持った方の治療に日々従事しながら、「あすはわが身」ということを全然考えていませんでした。

自分の「死」を意識出来たこともガンから得られた大きな利点です。死は誰にでも訪れ、

その時へ向かって人生を大切に生きていかなくてはならない。一度しかない私の人生が、「何がしたい？　何ができる？」と、いつも私に問うのです。自分の人生をまっとうするということは本当に大変なことなのです。

私にとって、ガンになって一番良かったことは、声が出なくなったことです。大きな障害を得たことは、医師として最もいい経験でした。病気になった人の苦痛は、健康な人にはなかなか理解できません。

せっかく取り戻した声をまた失った私は、これからも一生ハンディキャップと戦っていかなくてはなりません。しかし、こんなことは何でもありません。失った機能よりもっともっとたくさんの、大きなものを得て、多くのことを知ることができます。

自分にやりたいことがあれば努力もしますし、辛いことにも耐えることができます。さいわいにして、私の患者さんたちは、私を医師として必要としてくださり、病気になった私を励ましてくださいました。誰かから必要とされるということ、これは大変ありがたいことで、必ず復帰してまた診察室に座るという強い意欲に繋がりました。

そしていくつものガンと戦い、私の中にどんな困難にも立ち向かうことのできる力が備わりました。声は出なくても文章は書けます。音楽も聴けるし、演奏も楽しめます。前を向いて一歩一歩、生きて行くことができます。

人が生きた後には必ず「死」が訪れます。しかし人の死は悲しむべきことではなく、その人が若かろうが、老いていようが、死の時にこそ、その人の人生を、皆が祝福すべき時ではないでしょうか。

人は死んで現世で別れても、先に逝った家族、先達、友達、みんなに恥じないように、私は一日一日を生きていきたいと思っています。